

06/07/2026

「In Touch」にみる触る力を育てるために大切にしたい視点・配慮・心得

《触って学ぶ子どもたちを新たな世界の発見へと導く者として》

佐島 毅・福田奏子監訳「In Touch 触って学ぶ」ジヤース教育新社 2023

1 触察への意欲・心理的基盤

- まず育てるべきは「触る力」ではなく「触りたい気持ち」である。
- 触ることを楽しい経験にする。
- 新しい物への好奇心を育てる。
- 成功体験を積み重ねる。
- 「できた」という自信が探索意欲につながる。
- 失敗や恐怖体験をできるだけ避ける。
- 無理に触らせない。
- 子ども自身が触るかどうかを選べるようにする。
- 子どもの興味を出発点にする。
- 「教える」より「一緒に発見する」姿勢を大切にする。
- 子どもの主体的探索を待つ。
- 探索を急がせない。
- 探索の途中で答えを教えすぎない。



2 触察経験を豊かにする

- 多様な素材に触れる。
- 毎日の生活を教材にする。
- 家庭全体を教材化する。
- 台所・洗濯・掃除など生活経験を活用する。
- 自然物を積極的に触る。
- 本物に触れる経験を優先する。
- 模型は実物理解への橋渡しとして用いる。
- 模型だけで終わらない。
- 実物→模型→図という順序を意識する。
- できるだけ五感を組み合わせる。
- 音・匂い・触覚を関連づける。
- 経験を言葉と結び付ける。

3 触り方そのものを育てる

- 能動的に触る。
- 受動的に触らせるだけでは不十分。
- 「どこに触るか」を学ぶ。
- 「どう触るか」を学ぶ。
- 指先を動かす。
- 手全体を使う。
- 両手を使う。
- 必要に応じて指先を使い分ける。
- 包み込む。
- なぞる。
- 擦る。
- 押す。
- 持ち上げる。
- 回す。
- 動かす。
- 比べる。
- 繰り返し確認する。
- 触り方は物の性質によって変える。

4 二次元触察指導への配慮

① たどる

- 始点を明確にする。
- 終点を意識させる。
- 一方向にたどる。
- 指が線から外れないようにする。
- ゆっくり確認する。

② さがす

- 探索範囲を限定する。
- 枠を利用する。
- 系統的に探す。
- ランダムに探さない。
- 左右・上下の一定方向で探す。

③ 全体把握

- 部分だけ触らせない。
- 全体を往復する。
- 全体と部分を何度も行き来する。
- 全体像を頭の中で組み立てる時間を保障する。

④ 閉じた図形

- 輪郭を最後まで追う。
- 閉じたことを確認する。
- 内側・外側を区別する。
- 領域を意識する。

⑤ 分岐・交差

- 分岐点では立ち止まる。
- どちらへ進むか確認する。
- 分岐を記憶する。
- 必要なら戻る。

⑥ 図と地

- 必要な情報だけ取り出す。
- 情報量を増やしすぎない。
- 背景を単純にする。
- 線種を整理する。
- ノイズを減らす。

⑦ 全体イメージ

- 頭の中で再構成する。
- 言葉で説明する。
- 実物と対応づける。
- 模型と比較する。
- 地図と実空間を往復する。

5 環境づくり

- 安全な探索環境を整える。
- 家具配置を固定する。
- 整理整頓された環境にする。
- 子どもが一人で探索できるようにする。
- プレイコーナーを作る。
- 興味を引く教材を配置する。
- 触ってよい物を増やす。
- 「触ってはいけない」ばかりにしない。

6 指導者のかかわり

- Hand-under-hand を基本にする。
- 必要以上に手を操作しない。
- 子どもの主体性を尊重する。
- 子どものペースを尊重する。
- 言葉だけで説明しない。
- 触覚経験と言葉を結び付ける。
- 子どもの誤概念を否定しない。
- まず経験させ、その後に説明する。
- 子どもの理解の仕方を推測する。
- 「見えている人の常識」で説明しない。

7 概念形成

- 経験→言葉→概念の順序を大切にする。
- 一つの経験で終わらない。
- 同じ概念を様々な場面で経験する。
- 同じ物の多様性を経験する。
- 「触れる言葉」から始める。
- 「触れない言葉」は実物・模型・体験を通して補う。
- 抽象概念は具体経験の積み重ねから育てる。
- 「フローティング言語(分かったつもり)」に注意する。

8 触察教材を作る際の配慮

- 情報量を制限する。
- 一つの課題に一つの学習目標。
- 段階性を明確にする。
- 難易度を一度に上げない。
- 比較できる教材構成にする。
- 繰り返し使える教材にする。
- 遊びの要素を残す。
- 「触ること」そのものが楽しい教材にする。

触察の力をはぐくむために大切にしたい基本的指導観

- 触察能力は、触り方を教えることによって育つのではなく、『意味のある触察経験』を豊かに積み重ねることによって育つ。
- 実践者としてこの指導観を大切に、発達段階「①たどる → ②さがす → ③全体把握 → ④閉じた図形 → ⑤分岐・交差 → ⑥図と地 → ⑦全体イメージ」に即して系統的な指導を工夫しながら、あせらずじっくりと積み上げていく過程こそが重要である。
- 「教育の過程はそれ自体を超えるいかなる目的も持っていない」(Dewey, 1916)
Dewey, J. (1916) Democracy and Education: An Introduction to the Philosophy of Education. New York: The Macmillan Company.
松野安男訳(1975)『民主主義と教育(上)』,岩波書店。

『視覚障害の心理と発達・学習』
佐島毅 (監), 福田奏子 (編著) 金子書房
2026/7/17 刊行予定

